

炉辺の枕(13)

『家族と社会が壊れるとき／是枝裕和、ケン・ローチ』

複雑な世界を撮り続ける映画監督

美賀多台 つだわたる

これまで映画に関わる本を『記憶せよ、抗議せよ、そして生き延びよ／小森陽一对談集』『戦争映画を解説せよ！／永田喜嗣』と書いてきました。これらは映画の製作には関わらない、いわば映画評論家の立場から映画について書かれた本でした。今回、紹介するのは映画監督の本です。二人とも日本、英国だけでなく現在の世界的な映画界で指折り数えられる名監督と言えると思います。

評論家とは違って映画を分析する様な本ではありません。二人の対談(2019年クローズアップ現代とBS1スペシャル)を中心に据え、彼らが何を考えて映画を作っているかを述べるエッセイを並べています。二人の世界観がよくわかります。

彼らの年齢は少し離れていますが(ケン・ローチは1936年生まれ。是枝裕和は1962年生まれ)両者とも相手の作品に敬意を持っています。

是枝裕和とケン・ローチ

映画好きではない人のために少し二人の略歴を紹介します。

是枝裕和は1987年に番組制作会社テレビマンユニオンに入り、テレビのドキュメンタリーからスタートし『幻の光』(1995)で映画監督デビュー、その後の『ワンダフルライフ』『誰も知らない』『そして父になる』等は国際的な映画祭で受賞します。『万引き家族』(2018)でカンヌ映画祭の最高賞パルムドールを得ます。

最近では『怪物』(2023)『箱の中の羊』(2026)を撮っています。

私の評価は、最初の頃のドキュメンタリーにはとても惹かれましたが、映画サークルでも上映した初期の映画はあまり好きではありません。しかし最近の映画は「よくわかる」とまで言えませんが「いいなあ」と思っています。

ケン・ローチも最初はテレビのドキュメンタリーを撮っていました。英国の炭鉱町で暮らす貧しい少年と隼を描いた映画『ケス』(1969)で注目を集めます。一貫して労働者階級、移民など社会的弱者の視線で社会的テーマを描きました。

アイルランドの独立戦争を描いた『麦の穂を揺らす風』(2006)でカンヌ映画祭のパルムドールを得、さらに英国のリタイアした大工とシングルマザーという貧しい二人を描く『私は、ダニエル・ブレイク』(2016)で二度目のパルムドールを得るなど、高齢になっても活躍を続けて



います。

最新作は『オールド・オーク』(2023)です。英国の炭鉱町にやってきたシリア難民と住民の交流を描きました。この映画では主人公のパブ「オールド・オーク」の店主が幼馴染の労働者から手ひどい裏切りを受けます。

ケン・ローチは人間の見方が厳しいです。

人間に敬意と愛情を

この対談が組まれた直前に作られた映画はケン・ローチ『私は、ダニエル・ブレイク』『家族を想うとき』(2019)、是枝裕和『万引き家族』(2018)です。それらとさらに初期の作品についても、お互いにどこに魅力を感じるかを述べています。

ともに社会的弱者の側に立っていますが、ケン・ローチは是枝の映像を「人々を尊重し、愛情をもって撮影されている」と指摘しました。

二人はエキストラも含めて映画に関わる人々すべてに「敬意をもって」接しています。

そういう基本的な共感があって、その上で彼我の違いにも触れます。特に是枝は「ぼくはケン・ローチにはなれない」といいます。

それはケン・ローチは社会主義者を公言していますが、是枝は「イデオロギーというものを信じることが出来ない」と言い切ります。

是枝はケン・ローチの映画は「労働者階級の犯罪が映画の中では絶対に裁かれない」が印象的で、その理由を「もっと悪いことを合法的にやっているお金持ちや権力者達がいるのだから、彼らの犯罪など大したことではない」という答えに「しびれました」しかし「そこまで言い切れません」と言います。

私は『飢えたらばぬすめと神よなぜ言わぬ』(剣花坊)を思い出しました。

二人のこの違いは最新作の『箱の中の羊』『オールド・オーク』でも感じられました。